本だな「オックスフォード気象辞典」

Storm Dunlop　著
山岸米二郎　監訳
朝倉書店，2005年11月，306頁
定価7800円（本体価格）
ISBN4-254-16118-2

気象辞典といえば，「気象科学事典」（日本気象学会編，東京書籍，1998，637頁，11,429円（本体価格）），「気候学・気象学辞典」（吉野正敏他編集，二宮書店，1985，742頁，12,800円）が出版されている．このような既存の辞典に比較して，「オックスフォード気象辞典」はどのような特色があるのだろうか．内容の重複が多ければ，新しい辞典を購入する必要性は小さいであろう．または，新規に購入するのであれば，「オックスフォード気象辞典」だけで間に合うかも知れない．しかし，「オックスフォード気象辞典」の頁数はこれらの辞典の半分ほどしかないから，どちらかといえば，重複した内容ではないか，という先入観をもって「オックスフォード気象辞典」を通読した．その結果，この辞典が，どの辞典とも似ていない個性的な内容であることがわかった．

例えば，「オックスフォード気象辞典」には，ズールー（Zulu）という項目があるが，この言葉は，「気象科学事典」にも「気候学・気象学辞典」にもない．グリニッジ時刻の0時を００Ｚと書くが，そのＺはZuluの略とある．長年００Ｚには馴染んできたが，そのＺに意味（といってもZuluがどのような意味があるのか説明はない）があったとは，今まで知らなかった．

「オックスフォード気象辞典」を「気象科学事典」と比較してみよう．

1）「気象科学事典」は日本語で書かれた辞典であるが，「オックスフォード気象辞典」は英語で書かれた辞典の翻訳である．

2）「気象科学事典」は，大勢の著者が協力して執筆したが，「オックスフォード気象辞典」はすべての項目を1人の著者が執筆している．項目の選定に当たっては，多くの人から項目の候補を集めているが，最終的には，著者の好みで決めているような印象を受ける．

3）「気象科学事典」の執筆者は気象学の研究者であるが，「オックスフォード気象辞典」の著者は研究者というよりは気象の解説者である．著者は，気象，気候，その周辺分野のかなり広い分野を視野に入れている．

4）「気象科学事典」は日本の気象を念頭に置いて項目を選定しているが，「オックスフォード気象辞典」は，当然のことながら，欧米の気象を念頭に置いている．

「オックスフォード気象辞典」の個性的な内容は，このような背景の違いによって生じたものである．その特徴をまとめると以下のようになる．

1）頁数が多くないにもかかわらず，気象周辺分野の項目，特に，海洋学に関する項目が多い．世界各地の海流の名前はもとより，「アルゴ計画」など，最近になって使われ始めた用語も採用されており，気象・海洋辞典と呼びたいほどである．

2）局地風の固有名が多い．「名前をもつ局地風」という項目があり，世界各地の聞いたこともない局地風の名前がリストアップされている．また，それぞれの名前の項目をみれば，その局地風がどのようなものか，説明されている．その一方で，日本各地にある颪風やだし風の名前はない．

3）気象光学，大気電気など大気の物理現象に関する用語をかなり集めている．特に，「オーロラ」，「スプライト」の説明は詳しい．

4）気象学に関連した人名辞典としての役割も果たしている．

5）英国独特の項目がある．「聖スウィンズンの日（St Swinthin's day）」という項目には，「７月15日（聖スウィンズンの日）に雨が降れば，同じ場所に雨が40日間降り続ける．この迷信には根拠がない」とある．「ブハン期間（Buchan spell）」という項目には，「英国では，特別に寒冷か温暖な状態が１年間に９回発生する，ということを1867年にブハンが提案したが，その根拠はほとんどない」とある．日本で出版される気象辞典では，決して採用されない項目だろう．

6）項目の説明の詳しさを適当なレベルに押さえている．基本的な項目を詳しく説明するということはしない．特に，気象力学に関する項目はかなりあっさり扱われている．

このような特色を考えると，日本の気象に対しては，「オックスフォード気象辞典」で間に合うという感じはしない．しかし，「気象科学事典」と併用すると，お互いが相補的に関係にあるので，より充実した内容になるのではないかと思う．なお，［ ］書きで，訳者が説明を補っている項目がある．また，原書にはない美しい気象光学現象の写真が口絵に加えられている．いずれも，訳者の配慮が感じられる．　（木村龍治）

© 2006　日本気象学会